

「まつりごと ～天皇と政治の関わり」の歴史③」

南北朝時代～戦国時代

黒田裕樹（歴史講演家／大阪府内の高校社会科教師）

1. 「南北朝の合一」に秘められた罫

自分の代で平和を達成できぬまま、足利尊氏(あしかがたかうじ)が南朝の正平(しょうへい)13年／北朝の延文(えんぶん)3(1358)年に死去すると、尊氏の子の足利義詮(あしかがよしあきら)が幕府の2代目の征夷大將軍(せいいたいしょうぐん)となりましたが、義詮は千寿王(せんじゅおう)と名乗っていた4歳の頃に新田義貞(にったよしさだ)とともに鎌倉で挙兵したのを始めとして、彼の人生そのものが戦いに明け暮れた日々でした。

義詮は、父の尊氏が將軍であった頃から、叔父にあたる足利直義(あしかがただよし)や南朝の北畠親房(きたばたけちかふさ)、あるいは腹違いの兄弟である足利直冬(あしかがただふゆ)に攻められて京都を奪われるなど、自身の武力が決して優れているとは言えませんでした。

將軍就任後も、南朝に寝返った執事(後の管領)の細川清氏(ほそかわきよじ)に一時期は京都を落とされるなど政情不安が続き、將軍就任前に自分が守っていた関東には、弟の足利基氏(あしかがもとじ)を鎌倉府の長官たる鎌倉公方(かまくらくぼう)に任じたものの、基氏自身も南朝の攻撃に悩まされ続けました。

一方、南朝の正平7年／北朝の観応(かんのう)3(1352)年に南朝側が強引にお連れした北朝の三人の上皇(光厳=こうごん、光明=こうみょう、崇光=すこう)を京都へ戻したり、楠木正成(くすのきまさしげ)の子である楠木正儀(くすのきまさのり)から幕府に対する和睦(わぼく)の申し入れがあったりと軟化の動きもありましたが、結局は不調に終わり、義詮は南朝の正平22年／北朝の貞治(じょうじ)6(1367)年に38歳の若さで死去しました。

なお、義詮の死去の翌年にあたる南朝の正平23年／北朝の応安(おうあん)元(1368)年には、南朝を開いた後醍醐(ごだいご)天皇の子である後村上(ごむらかみ)天皇も崩御(ほうぎょ、天皇・皇后・皇太后・太皇太后がお亡くなりになること)され、子の長慶(ちやうけい)天皇が即位されましたが、長慶天皇の治世においては、南北朝の和睦の動きはほとんど見受けられませんでした。

義詮の死後、子の足利義満(あしかがよしみつ)が3代將軍に就任しましたが、まだ10代前半と若かったため、管領の細川頼之(ほそかわよりゆき)が政治を代行しており、南朝の天授(てんじゆ)5年／北朝の康暦(こうりやく)元(1379)年に起きた「康暦の政変」によって頼之が追放されてから、義満独自の政治

が行われるようになりました。

義満は自分の思いどおりの政治を行うため、まずは「子飼いの軍隊」ともいうべき將軍直属の常備軍である奉公衆(ほうこうしゅう)を積極的に増強し、その費用を捻出(ねんしゅつ)するために、山城(現在の京都府南部)の土地の一部を奉公衆に与えたり、山城の荘園の年貢の半分を奉公衆に給付するという半済令(はんぜいれい)を出したりしました。

京都において兵糧を確保できるようになった奉公衆は、一年を通して將軍の近くに常駐できるようになり、結果として義満の軍事的立場も強化されることにつながりました。

こうして自分の足元を固めることに成功した義満は、自分の命令ひとつで動く武力を背景に、内政や外交、あるいは軍事面において強力な政治を行うことになるのです。

尊氏が亡くなった14世紀後半の頃から、南朝の勢力は時が流れるにつれて衰退していきましたが、三種の神器を有しておられるという正当性を持っていたため、幕府に反対する勢力に利用されて出兵するなど動乱がなかなか治まりませんでした。

それもこれも、朝廷が二つに分かれて争う状態が続いていたのが大きな理由でした。先の鎌倉幕府や後の戦国時代、あるいは江戸幕府など、武家政権の多くは長い伝統に基づく権威を有する朝廷の扱いに悩まされてきましたが、それが二つもあってはたまったものではありません。

なぜなら、対立している二つの勢力が、それぞれ北朝や南朝を別々に担(か)ぐことによって、お互いが朝廷の後見を得ることになり、争い事がいつまで経っても収拾がつかなくなるからです。

このため、義満も南北朝が一つになるよう工作を続け、南朝側も長慶天皇から皇位を継承された後亀山(ごかめやま)天皇が和睦に応じられたことで、南朝の元中(げんちゅう)9年／北朝の明德(めいとく)3(1392)年について「南北朝の合一(ごういつ)」が実現しました。

南北朝の合一は、南朝の後亀山天皇が北朝の後小松(ごこまつ)天皇に三種の神器を譲られて退位されるという形式で行われましたが、そこには義満による巧妙な罠(わな)が仕掛けられていました。

義満が南朝の後亀山天皇に出した和睦の条件は以下のとおりでした。

- 1.三種の神器は南朝の後亀山天皇から北朝の後小松天皇へ「讓国(じょうこく)の儀式」で渡すこと
- 2.皇位の継承に際しては、南北両朝が交互に即位する両統迭立(りょうとうてつりつ)を行うこと
- 3.諸国の国衙領(こくがりょう、国の領地のこと)を南朝の所有とすること

このうち一番重要なのは1.でした。なぜなら「讓国の儀式」で讓位するという事は、後亀山天皇のご在位を、ひいては南朝の後醍醐—後村上一—長慶—後亀山という皇位の継承を正式なものとして認めるということの意味していたからです。

また、今後も両統迭立が行われるということは、後亀山天皇の子がいずれは天皇になるということであり、さらに国衙領の所有が認められるのであれば、南朝にとってはかなり有利な内容でした。しかし、それらはあくまで北朝と幕府が約束を守ればの話であり、実は、義満は条件のすべてを反故(ほご)にしてしまったのです。

南北朝の合一の条件のうち、まず皇位の継承の際の「讓国の儀式」は一切行われませんでした。後亀山・後小松の両天皇のご対面もなく、三種の神器が単に宮中(きゅうちゅう、ここでは朝廷の中という意味)に戻ったという形式となったのです。

これでは北朝が「失くした神器を取り戻した」ということになり、南朝の正当性が一切認められないことを意味します。また、退位された後亀山上皇も当初は正式に上皇と認められず、義満の裁定によって「不登極帝(ふとうきよくのてい)」、すなわち「即位していない天皇」に上皇の地位を与えるとということになりましたが、即位が認められなければ、後亀山上皇が「治天(ちてん)の君(きみ)」として院政を行うことができません。

両統迭立の約束も後小松天皇の次の天皇となる皇太子が長いあいだ決められず、義満の死後に後小松天皇の子の称光(しょうこう)天皇が即位されたことで、南朝への皇位継承の道が遠くなり、さらには国衙領もこの頃までには実質的にほとんど存在していませんでした。

要するに、義満は南朝に空手形(からてがた)をつかませたのです。南北朝の合一に関する義満の手法は卑怯(ひきょう)かつ詐欺的なものでしたが、同時に彼の行動によって二つあった朝廷が一つにまとまったことで、それまでの混乱状態から回復して世の中が平和に向かうという皮肉な結果になりました。まさに「平和は綺麗事だけでは達成できない」ということですね。

なお、義満に「だまされた」形となった南朝の勢力は、後亀山上皇が一時期は京都から吉野へ移られるなど、幕府や朝廷(＝北朝)に対して様々な抵抗を続けることとなりますが、詳しくは後で紹介します。

2. 義満の野望と挫折

南北朝の合一は長い間の動乱に終止符を打つ効果をもたらしましたが、これ以外にも義満は自らが本格的に政治を行い始めた前後から、内政面や軍事面においてその実力を遺憾(いっかん)なく発揮していきました。

南朝の天授4年／北朝の永和(えいわ)4(1378)年、義満は京都の室町に「花の御所」と後に呼ばれた豪華な邸宅を造営し、以後はここで政治を行ったことから、足利氏による幕府のことを「室町幕府」と呼ぶようになりました。

また、義満はこの頃までに大きくなり過ぎて幕府の言うことを聞かなくなった守護大名の弱体化を目指し、南朝の元中7年／北朝の明徳元(1390)年に美濃(みの、現在の岐阜県南部)・尾張(おわり、現在の愛知県西部)・伊勢(いせ、現在の三重県北部)の守護を兼ねた土岐康行(とぎやすゆき)を滅ぼしました。これ

を「土岐康行の乱」といいます。

翌年の南朝の元中 8 年／北朝の明德 2 (1391) 年には、西国 11 か国の守護を兼ねたことから「六分一殿(ろくぶんのいちどの)」と呼ばれた山名氏(やまなし)に内紛が起きると、義満はこれに乗じて山名氏清(やまなうじきよ)を滅ぼしました。この戦いを、当時の年号から「明德の乱」といいます。

さらに義満は、中国の明(みん)と勝手に貿易を行っていた周防(すおう、現在の山口県東部)の守護大名である大内義弘(おおうちよしひろ)を応永(おうえい)6 (1399)年に滅ぼすことに成功しました。この戦いは、当時の年号から「応永の乱」と呼ばれています。

応永の乱で大内氏の勢力を抑えることに成功した義満は、それまで大内氏が独自に行っていた明との貿易を、幕府として正式に行う決意を固め、応永 8 (1401)年に明に使者を送って国交を開くと、翌 1402 (応永 9)年には明の皇帝が義満を「日本国王」に封ずるとの返書をよこし、同時に明の暦を送ってきました。

中国の皇帝から「国王」に任じられて暦を受け取るという行為は、中国を宗主国と認め、屈辱的な朝貢(ちょうこう)外交を行うことを意味しました。

これは、聖徳太子(しょうとくたいし)以来続いてきた我が国の中国大陸からの独立性を損なうものでしたが、義満は自らを「日本国王臣源道義(にほんこくおうしんげんどうぎ)」と称して貿易を行いました。なお、道義とは出家した義満の法号です。

なぜ義満は朝貢外交を受け入れてまで貿易を行ったのでしょうか。主な理由として考えられるのは、貿易による莫大(ばくだい)な利益を得るためには、対等であろうが朝貢であろうが問題ないという経済重視の姿勢ですが、もうひとつの別に隠された理由がありました。

実は、義満は自らが「天皇を超える存在」として君臨するという大きな野望を持っており、明から「日本国王」に任じられること、つまり明からの「お墨付き」を得ることが、野望達成の近道になると確信していたのです。

義満は、母が皇室の血を引いていたこともあって、自身も出世街道を順調に歩んでいきました。南朝の弘和(こうわ)3年／北朝の永徳(えいとく)3 (1383)年には臣下でありながら皇族と同等の待遇となる准三宮(じゅさんぐう、または准后=じゅごう)となり、応永元 (1394)年には太政大臣(たじょうだいじん)にまで出世しました。

また、義満は自身の太政大臣の就任祝賀式に出席した当時の関白に対して、自らを拝礼して見送らせました。関白は太政大臣より上位ですから普通に考えれば話が反対ですが、これは義満が当時すでに天皇に近い待遇を得ていたことを間接的に証明しています。

さらに義満は、南北朝の合一の際に後龜山上皇に対して強引に上皇待遇を与えたように、朝廷の人事権にまで口出しを始め、天皇の子が出家して入る門跡寺院(もんせきじいん)にも、自分の子を次々と

入れました。そのうちの一人が比叡山延暦寺(ひえいざんえんりゃくじ)の最高位である天台座主(てんだいざす)の義円(ぎえん)ですが、彼は後に再び今回の講座に登場します。

義満は太政大臣に就任する直前に、征夷大將軍を辞任して子の足利義持(あしかがよしもち)が4代將軍となり、同年には太政大臣を辞職し出家しましたが、依然として政治の実権を持ち続けました。將軍や太政大臣といっても天皇の臣下でしかなく、それらの身分に縛(しば)られない方が、自分の野望達成(=天皇を超える存在になること)には都合が良いと判断したのかもしれませんが。

応永6(1399)年、義満が建立(こんりゅう)させた相国寺(しょうこくじ)の七重大塔(しちじゅうだいとう)が完成して落慶法要(らくけいほうよう)が行われましたが、七重大塔の高さは約109mと我が国の仏塔(ぶつとう)で一番の高さを誇っていました。

しかも相国寺は当時の京都御所のすぐ北にあり、天皇がおわす御所の上座(かみざ)の位置に、御所を見下ろすことができる巨大な建物を造営したことになります。義満の意図がどこにあったのかが気になるところです。

また、義満は金閣寺(きんかくじ)と呼ばれる寺院を建築したことでも有名であり、これは現在の鹿苑寺(ろくおんじ)の通称となっていますが、義満の当時は金閣寺を含む一帯が北山第(きたやまてい)と呼ばれ、義満の政務地でした。

義満が政務地の象徴として建築したのが現在の金閣寺と考えられていますが、その金閣寺は1階が寝殿造(しんでんづくり)で2階が武家造(ぶけづくり、別名を書院造=しょいんづくり)、3階が禅宗様(ぜんしゅうよう)という変わった構造をしていることでも有名ですね。

実は、この金閣寺の構造にも義満の真意が隠されているのです。

金閣寺の1階は寝殿造ですが、これは皇室や貴族などの朝廷をあらわしており、2階の武家造は室町幕府を意味しています。つまり、幕府が朝廷の上に存在するという意思を義満が明確に示しているという解釈が可能になるのです。

さらにその上の3階の禅宗様は中国風ですが、これは当時明から「日本国王」に任じられていた義満自身を指していると考えられ、義満が「自分は朝廷も幕府も超えた存在である」と自ら宣言しているに等しいこととなります。

しかも、金閣寺の屋根には聖天子(せいてんし)が出現するときに世に出るとされる、中国の伝説上の鳥である鳳凰(ほうおう)が飾られていますが、全国の寺院で屋根に鳳凰があるのは、金閣寺の他にはこれを真似(まね)てつくられた銀閣寺(ぎんかくじ)と、平安時代の建築物である宇治の平等院鳳凰堂(びょうどういんほうおうどう)くらいしかありません。

寺院の屋根飾りとしては滅多に用いられない鳳凰が金閣寺に使用されている理由は、そこを普段から使用する人間、つまり義満こそが聖天子そのものであると自負していたからだとは考えられない

でしょうか。

こうして様々な手段で自身の地位を固めた義満は、妻である日野康子(ひのやすこ)を天皇の生母と同じ地位を与えられる准母(じゅんぼ)とするなど、身内にも皇室に近い待遇を与え始めました。さらに義満の子の足利義嗣(あしかがよしつぐ)が成人した際の儀式である元服(げんぷく)の際には、宮中で天皇の子である親王に準じた形式で行いました。

つまり、義嗣は親王と同じ待遇になったのです。ということは、近い将来には義嗣が天皇になり、義満自身は天皇の父、つまり上皇に準ぜられ、治天の君として「天皇を超える存在」となり、我が国をほしいままに支配することになる。皇室にとってはまさに最大の危機でしたが、義満の野望は、結局は実現することはありませんでした。

なぜなら、義嗣が元服した直後の応永 15 (1408) 年に義満は病に倒れ、急死してしまったからです。それまで元気だったのが急に体調が悪化したことから、義満が天皇を超える存在になることを恐れた朝廷などの関係者から暗殺されたのではないかと、という説が唱えられています。

その真偽は定かではありませんが、いずれにせよ、自分の野望が達成される直前でこの世を去らなければならなかったのは、義満にとってさぞかし無念であったことでしょう。

なお、義満の死後、朝廷は太上天皇(だいじょうてんのう)、つまり上皇の地位を追贈しました。幕府はこれを辞退しましたが、皇室とは直接的に縁のない義満に対して、なぜ朝廷が上皇を追贈しなければならなかったのでしょうか。

確固たる証拠が存在しない以上は、永遠の謎と言わざるを得ないのかもしれませんが。

3. 「神に選ばれた将軍」と「後南朝」の悲劇

応永 15 (1408) 年に義満が急死した後、義満の子で 4 代将軍の足利義持と、その子で 5 代将軍の足利義量(あしかがよしかず)が存在していた頃の室町幕府は、九州地方が有力守護の支配を受けたり、鎌倉公方が幕府の命令に従わずに半独立状態になったりするなど、常に不安定な状態が続きました。

特に鎌倉府では、応永 23 (1416) 年に前の関東管領であった上杉禅秀(うえすぎぜんしゅう)が鎌倉公方の足利持氏(あしかがもちうじ)を追放するなどの混乱が起きましたが、翌年には鎮圧されました。この争いを「上杉禅秀の乱」といいます。

このように地方では常に不安があった一方で、幕府周辺においては将軍と有力守護大名とがお互いに権力を主張しながららみ合いを続けましたが、これがかえって勢力の均衡(きんこう)を生んだことによって、皮肉にも大きな争いが起きずに小康状態を保っていました。

こうした中で応永 32 (1425) 年に 5 代将軍の義量が 19 歳の若さで急死すると、父親である義持が代わりに政務をとりましたが、応永 35 (1428) 年までに重病となり、このままでは将軍家の嫡流(ち

やくりゅう、直系の血脈のここの血筋が絶えるという危機となりましたが、義持は自らが後継者を決めることをしませんでした。

なぜなら、幕府と有力守護大名との権力に大きな差がなく、将軍の権威も低下していたために、自身が誰を後継としても、守護大名などからの反発が必至と思われたために出来なかったのです。

義持が自分で後継者を決めなかったことを受けて、幕府の家臣たちはあれこれ考えた末に、義持の弟たちで義満の子でもある4人の僧の名前を書いた籤(くじ)を作成し、京都の石清水八幡宮(いわしみずはちまんぐう)の神前でその籤を引きました。

そして、応永35(1428)年に義持が亡くなった直後に当たり籤を開封した結果、比叡山延暦寺の最高位である天台座主の義円が選ばれました。

義満がかつて自分の権力強化のために門跡寺院に自分の子を次々と送り込んだことが、こんなところで役に立ったのです。将軍に選ばれた義円は直ちに還俗(げんぞく、一度出家した者がもとの俗人に戻る)し、名を義宣(よしのぶ)から後に義教(よしのり)と改めました。

後の世で「籤引(くじびき)将軍」と呼ばれた6代将軍の足利義教の誕生です。

義教は籤によって将軍に就任したという事実を「自分は神に選ばれた将軍である」と解釈することで、将軍就任後は強気の政治を実行しましたが、そんな義教が目指したのが、衰えていた将軍の権威の向上と、守護たちに政治をさせない将軍親政の復活でした。

まず義教は、4代将軍義持の時代に中断していた日明貿易を復活させて幕府の財政を潤すと、その財力で奉公衆を整備して、将軍直属の軍事力をさらに強化した後に九州地方へ攻めのぼり、義満ですら果たせなかった九州平定を実現しました。

次に義教は、宗教勢力の掌握(しょうあく、自分の思いどおりにすること)を目指しました。将軍就任以前は天台座主として宗教界のトップに君臨していただけに、義教は今までの将軍とは違って、宗教に対する畏怖(いふ、恐れおののくこと)を全く感じていなかったのです。

義教と延暦寺とはやがて内戦状態となりましたが、義教が最後までぶれることなく厳しい姿勢を崩さなかったため、絶望した延暦寺では、永享(えいきょう)7(1435)年に総本堂である根本中堂(こんぼんちゅうどう)に火をかけて多数の僧が焼身自殺するという騒ぎとなり、結果として、義教は宗教勢力をも完全に支配下に置くことに成功しました。

比叡山延暦寺の焼き討ちといえば織田信長(おだのぶなが)が有名ですが、それよりも100年以上も前に、武力によって延暦寺を支配した将軍がいたことは意外にも知られていません。

義教は、中央で使用する年号を無視するなど、将軍の命令に逆らい続けた鎌倉府に対しても牙(きば)をむきました。鎌倉公方の足利持氏と関東管領の上杉憲実(うえずぎのりざね)との間が不和になると、

義教は関東へ出兵して、永享 11 (1439) 年に持氏を滅ぼすことに成功しました。この争いは当時の年号から「永享の乱」と呼ばれています。

さらに翌永享 12 (1440) 年には、持氏の遺児を擁(よう)して結城氏朝(ゆうきうじとも)らが挙兵しましたが、義教はこれらも滅ぼしました。この戦いを「結城合戦(ゆうきかっせん)」といいます。

かくして、鎌倉をも自分の支配下に入れた義教の権力は絶対的なものとなり、古代の盟神探湯(くかたち、裁判において熱湯の中に手を入れさせ、手がただれるかどうかで真偽=しんぎを判断するという神判=しんぱんのこと)を復活させたり、些細(ささい)なことでも激怒して死罪などの厳しい処断を下したりした義教に対して、周囲は「万人恐怖」と震え上がりました。

義教からしてみれば、幕府や将軍の権威を高めるための当然の行為でもあったのですが、その余りにも強引な政治手法は、必然的に守護大名などの対立する勢力の反発を招くことになりました。そして義教の恐怖政治は、かの織田信長と同じように、突然その幕を下ろす日がやってくるのです。

嘉吉(かきつ)元 (1441) 年旧暦 6 月、義教は結城合戦の祝勝会を行うという名目で、守護大名の赤松満祐(あかまつみつすけ)の屋敷に招かれましたが、宴(うたげ)の最中に突如(とつじょ)として乱入してきた武者たちに取り押さえられ、あっという間に首をはねられました。

そのあまりの手際の良さに、周囲の誰もが何の手助けもできなかったそうです。なお、この事件は当時の年号から「嘉吉の乱」といいます。

義教の突然の最期は、幕府を含めた周囲に大混乱をもたらしました。義教を殺した赤松氏は幕府によって後に討伐されましたが、義教の死は、幕府や将軍の権威を必然的に大きく低下させ、この後二度と復活できなかったのです。

また、義教による厳しい政策と、彼を殺したことによって没落した赤松氏の存在とが、義満によってもたらされた「高貴な血統」とんでもない悲劇に巻き込んでしまうことを、この後の誰が予想できたでしょうか。

約 50 年以上にわたって争いを続けてきた南北朝は、先述のとおり南朝の元中 9 年／北朝の明德 3 (1392) 年に義満の働きかけによって合一を果たしましたが、当初の条件であった「自分の子孫が再び天皇として即位する」などをことごとく反故にされた南朝の不満が高まっていました。

応永 17 (1410) 年、自分の子を皇太子と認められないことを不服として、南朝の後亀山上皇が京都から吉野へと移られました。その後、応永 19 (1412) 年に北朝の後小松天皇が子の称光天皇に譲位されると、南朝に味方した伊勢の国司(こくし、地方の国の行政官のこと)の北畠満雅(きたばたけみつまさ)が挙兵しましたが、失敗に終わりました。

戦後に幕府と和睦したことで、後亀山上皇は京都へ再び戻られ、そのまま応永 31 (1424) 年に崩御されましたが、その後も、南朝の勢力は皇位を回復すべく、様々な手段で幕府と対立することに

なりました。

南北朝の合一以後における南朝のこれら一連の動きは、今日では「後南朝」と呼ばれています。

称光天皇はご病弱で子孫がおられず、北朝の嫡流が断絶する可能性が高くなりました。後南朝は今度こそ自己の血統に皇位が継承されると期待していましたが、正長(しょうちょう)元(1428)年に称光天皇が崩御されると、幕府は北朝の血統である伏見宮家(ふしみのみやけ)から後花園(ごはなぞの)天皇を即位させました。

またしても皇位継承の夢が破れた後南朝は、北畠満雅が後亀山天皇の孫にあたる小倉宮聖承(おぐらのみやせいしょう)を率いて再び挙兵しました。今度の戦闘は、鎌倉公方の足利持氏をも巻き込んだ激しいものとなりましたが、持氏が幕府と和睦したこともあり、満雅が討ち死にして挙兵は失敗に終わりました。

後南朝が朝廷や幕府に抵抗を続けることに激怒した将軍義教は、それまでの幕府の政策を転換して、後南朝の血統を根絶やしにさせることを決断しました。すなわち、後南朝の子孫を片っ端から寺院に送り込むことで、子孫を残させないようにするとともに、彼らの家来を幕府が召(め)し抱えることで切り離そうとしたのです。

義教による徹底した対策によって、主だった後南朝の血統はすべて断絶してしまいましたが、「万人恐怖」と称された義教の厳しい処置に対する後南朝の恨みは深く、義教が嘉吉の乱で不慮の最期を遂げた後に前代未聞の大事件が起きてしまいました。

嘉吉3(1443)年旧暦9月、京都御所の内裏(だいり)に何者かが侵入し、内裏に火をかけるとともに三種の神器を持ち去ろうとしました。すぐさま幕府軍が駆けつけ激しい戦闘となりましたが、神器のうち神璽(しんじ、別名を八尺瓊勾玉=やさかにのまがたま)が奪われてしまいました。

この事件は「御所の内裏」を意味する「禁闕(きんけつ)の変」と呼ばれており、御所を襲ったのは金蔵主(こんぞうす)・通蔵主(つうぞうす)の兄弟など後南朝の人々でした。金蔵主と通蔵主は後亀山天皇の血を引いているとされていますが定かではなく、金蔵主は禁闕の変の際に討たれ、通蔵主などは捕えられて流罪(るざい)となり、その後の消息は不明となっています。

また、小倉宮聖承の子で出家していた教尊(きょうそん)も、禁闕の変への関与が疑われて隠岐(おき)へ流罪となり、小倉宮の血統も断絶となりました。こうして事件そのものは鎮圧されましたが、三種の神器のうち神璽が後南朝に奪われたままであることは、天皇としての正当性を損ねることにつながることから、朝廷や幕府を不安にさせていました。

ところが、このような異常事態を解決するために、意外な人物が手を挙げたのです。それは、かつて嘉吉の乱で義教を殺害したために滅ぼされた赤松氏の遺臣でした。

神璽を後南朝に奪われて困り果てていた朝廷や幕府に対して、赤松氏の遺臣は「自分たちが神璽を

取り返してくるので、赤松氏を再興してほしい」と申し出ました。

赤松氏は幕府にとって「将軍殺し」の天敵であり、禁闕の変の際にも後南朝側についていました。そんな赤松氏であれば、後南朝に味方と偽(いつわ)って吉野からさらに山奥まで入るのは容易(たやす)いことです。

幕府は赤松氏の申し出を許可すると、遺臣たちは長祿(ちょうろく)元(1457)年に後南朝の御所を襲い、南朝の血を引くとされる一ノ宮・二ノ宮兄弟を殺害しましたが、神璽については一時は持ち去ったものの、憤激した後南朝を支持する勢力によって奪い返されてしまいました。

赤松氏の遺臣たちは、1年後の長祿2(1458)年に一ノ宮・二ノ宮の母の御所を再び襲い、今度こそ神璽を奪い去ることに成功しました。こうして禁闕の変以来、多くの血を流して約15年ぶりに神璽が朝廷に戻ったのです。

これら一連の事件は、当時の年号から「長祿の変」と呼ばれています。なお、殺害された一ノ宮・二ノ宮の兄弟(別名を自天王=じてんのう、忠義王=ちゅうぎおう)は前述のとおり南朝の血を引くとされていますが、その詳しい血統は分かっていません。また、神璽を持ち帰った赤松氏は再興が認められ、後に守護大名に返り咲いています。

長祿の変以後、後南朝は「ある大乱」に関わったのを最後として、我が国に残された史料からその姿を消してしまいました。そもそも後南朝という立場となったのは、南北朝が合一した際に義満が南朝をだましたからであり、また義教が積極的に血統を断絶させたのも大きく影響しました。

さらには、義教が非業の死を遂げなければならなかった原因をつくった赤松氏によって、後南朝の御所に最後まで残っておられた高貴な血統を絶たれてしまうという悲劇にもつながってしまいました。歴史というものは、時として苛酷(かこく)な流れを生み出すものなのではないでしょうか。

こうして後南朝は歴史の表舞台から消滅しましたが、民間の伝承としては生き残り続け、後に明治44(1911)年に南朝が正統であると明治天皇がご裁断されてからは、自分こそが後南朝の末裔(まつえい)であると主張する人々が出現し始めました。なかでも有名なのは、第二次世界大戦の終戦直後に話題になった「熊沢天皇」こと熊沢寛道(くまざわひろみち)氏ですね。

ところで、後南朝が現時点で最後の史料にその姿が残されている「ある大乱」とは、いったい何のことでしょうか。

実は、それこそが戦国時代の幕開けになったとされる「応仁(おうにん)の乱」なのです(詳しくは後述します)。

初代将軍の足利尊氏(あしかがたかあき)がもたらした「負の遺産」の処理に悩まされた室町幕府でしたが、そんな中で義満・義教父子(おやこ)は、幕府の命運をかけて果敢に改革に取り組みました。

しかしながら、いかに幕府の権威を高めるためとはいえ、義満が自ら「天皇を超える存在」となろうとしたり、あるいは義教が「神に選ばれた将軍」として様々な恐怖政治を行ったりしたことは、余りにも「やり過ぎ」でした。

それゆえに、この父子は自らの野望が達成される直前に不審な急死を遂げたり、突然殺害されたりするなど、それぞれが無念の最期を迎えてしまいました。

義教の死去以後、この父子のように積極的な政治を行う将軍はついに現れず、幕府の権力や権威は衰える一方となりました。そして、中央政府たる幕府が機能しないのを良いことに、全国の有力者が思うままに自分の政治を行い始めたことで、我が国は「戦国の世」を迎えることになってしまうのです。

4. 「応仁の乱」の思惑と現実

先述のとおり、「万人恐怖」の独裁者であった6代将軍足利義教が嘉吉元（1441）年に殺害されたことで、それまで義教の存在を目の上のたんこぶのように苦々しく思っていた守護大名たちは、胸をなでおろして安堵(あんど)しました。

しかしながら、たとえ強引な手法であったとしても、世の中をそれなりにまとめていた将軍がいなくなったことで、守護大名はおろかその下の守護代も含めて、まるで籠(たが)が外れた桶(おけ)のように各自がバラバラに行動を始めてしまい、收拾がつかなくなってしまいました。

そんな幕府の試練は、義教暗殺の直後に早速訪れました。嘉吉の乱で義教を殺害した赤松満祐を討伐するために幕府軍が遠征した隙(すき)をついて、多数の農民が京都を占拠して将軍の「代始めの徳政」を要求したのです。これは当時の年号から「嘉吉の徳政一揆」と呼ばれています。

幕府の管領であった細川持之(ほそかわもちゆき)は高利貸しの土倉(どそう)から賄賂を受け取っていたため、一揆勢の要求を無視して鎮圧するつもりでした。しかし、彼の意見は他の守護大名に聞き入れられず、結局は一揆勢との話し合いに応じざるを得なくなったのです。

「籠が外れた桶」状態の室町幕府には、もはや強引な政策は不可能だったのでした。しかも、一揆勢との交渉によって幕府は更なる難題を抱え込むことになってしまうのです。

管領の細川持之は、一揆勢との話し合いによって「農民限定の徳政令」を出すことで彼らを納得させようとしたのですが、何と一揆勢がこの条件を拒否して、徳政令の範囲を公家や武家にも広げるように要求しました。一揆勢の主力であった農民からすれば、公家や武家といった、いわゆる支配者層は憎むべき敵であるはずなのに、なぜこんなことを要求したのでしょうか。

確かに一揆勢の主体は農民でしたが、実は彼らは地侍(じごむらい、守護大名などと主従関係を結んで武士の身分を得た者のこと)の指導の下に動いていました。地侍たちは、支配者層にも徳政令の範囲を広げて彼らに「恩を売る」かたちにしておけば、徳政令発布後に処罰されることはないであろうと計算してい

たとえられています。

一揆勢の要求に幕府は困惑しましたが、ただでさえ兵力が不足しているうえに、有力守護大名たちの考えがバラバラではどうすることもできません。結局、幕府は「山城一国に限定した完全な徳政令」を發布せざるを得なくなりましたが、この結果に今度は大寺社、特に比叡山延暦寺が激怒しました。

なぜなら、徳政令には、大寺社が寄進という名の下に人々から財産を取り上げていたのを返還するように書いていたからです。延暦寺は神輿(しんよ)を担(かつ)いで幕府に強訴(ごうそ)し、徳政令の対象から寺社を無理やり外すことに成功しました。

徳政令の発布によって、幕府が金融業者などからの信頼を失うのみならず、かつて義教が苦勞して抑え付けていた圧力団体としての宗教勢力の復活をも招いてしまったのです。

義教の死後に幕府の権威が著しく低下した理由の一つに「将軍の後継者不足」がありました。義教は天台座主(てんだいざす)から還俗して将軍になったため、暗殺されたときに二人いた男子がまだ幼かったのです。

義教の後を継いで嘉吉2(1442)年に7代将軍となった足利義勝(あしかがよしかつ)でしたが、就任時わずか9歳では自ら政治ができるはずもなく、しかも翌嘉吉3(1443)年に急死してしまい、その後は弟の足利義政(あしかがよしまさ)が8歳で8代将軍となりました。

就任した当初の義政は、祖父の足利義満や父の義教にならって将軍権力の復活を図り、永享の乱の後に鎌倉公方となった足利成氏(あしかがしげうじ)と関東管領の上杉氏との内紛にも積極的に関わりました。なお、享徳(きょうとく)3(1454)年に始まった成氏と上杉氏との争いを、当時の年号から「享徳の乱」といいます。

しかし、義政の妻である日野富子(ひのとみこ)や妻の実家の日野氏、あるいは有力な守護大名らが次々と政治に介入したことで、いつしか義政は政治への関心を失って贅沢(ぜいたく)な暮らしを始めたため、将軍としての人望を失ってしまいました。政治への興味をなくした義政は、将軍の地位を誰かに譲って気ままに余生を過ごしたいと思いましたが、妻の富子との間には将軍後継となるべき成長した男子がいませんでした。

一日も早く隠居がしたかった義政は、弟の足利義視(あしかがよしみ)を養子として後継者に迎えました。その直後に日野富子との間に男子(後の足利義尚=あしかがよしひさ)が生まれてしまいました。

義視からすれば、一度約束された将軍後継の地位を反故(ほご)にされてはたまったものではありませんし、義尚(よしひさ)の母の富子からすれば、自分がお腹を痛めて産んだ我が子が将軍後継になれないことほど愚かな話はありません。しかし、初代将軍である足利尊氏のように優柔不断な義政には、どちらを後継にするかを定めることが出来ませんでした。

義政がいつまで経っても後継を決めないことに業(ごう)を煮やした義視と富子は、義視が管領の細川勝元(ほそかわかつもと)に、富子が侍所(さむらいどころ)の長官である四職(ししき)筆頭の山名宗全(やまなそうぜん、出家前の名は山名持豊=やまなもちよ)にそれぞれ接近すると、細川・山名の両氏がこれを好機として、幕府の政治の実権を握ろうとお互いに争い始めました。

この他にも守護大名の畠山氏(はたけやまし)や斯波氏(しばし)の家督(かどく)争いがからんだことで、応仁元(1467)年について京都で大きな戦いが起きてしまいました。戦国時代の幕開けともいわれる「応仁の乱」の始まりです。

応仁の乱が起きた後、有力な守護大名が細川氏あるいは山名氏に所属したり、あるいは分裂して両軍それぞれについたりしたので、戦いの規模はますます大きくなりました。なお、両者の位置関係から細川氏側が東軍、山名氏側が西軍と呼ばれており、また京都の西陣(にしじん)という地名は、山名氏が京都の堀川(ほりかわ)より西に陣を置いたことが由来となっています。

緒戦の戦いは山名氏に優位に展開しましたが、細川氏が巻き返して将軍義政を保護したことで、東軍の優勢となりました。しかし、今度は山名氏が守護大名の大内政弘(おおうちまさひろ)に声をかけて京都へと攻めのぼらせるなど、両軍は一進一退の戦いを続けました。

そんな折、応仁の乱のきっかけをつくった当事者たちに異変が起きました。将軍義政の弟である義視は東軍の細川氏についていましたが、細川氏が義政を迎え入れた後に、義視の政敵である伊勢貞親(いせさだちか)が再び重用されたことに反発して出奔(しゅっぽん)しました。

翌応仁2(1468)年に一旦は京都へ戻ったものの再び出奔した義視は、こともあろうにライバルの義尚を支持していた西軍の山名氏へと身を投じました。これは、将軍を奪われて大義名分を失っていた山名宗全が、巻き返し的手段として義視を迎えたためと考えられており、事実、この後山名氏は義視を「将軍格」として様々な人事を発令しています。

義視が西軍に属したことで、応仁の乱の戦いの構図は、当初の「足利義政—足利義視—細川勝元 vs. 日野富子—足利義尚—山名宗全」から「細川勝元—足利義政—日野富子—足利義尚 vs. 山名宗全—足利義視」という形式となり、敵と味方とが完全に「ねじれ現象」となってしまいました。

これでは何のために戦っているのか分かりません。戦いの当事者たちにもいつしか厭戦(えんせん、戦争をするのをいやに思うこと)の気分が盛り上がってききましたが、応仁の乱のきっかけのひとつであった守護大名の家督争いに決着がつかなかったこともあり、戦いはいつしか京都から全国に広がって、延々と果てしなく続けられました。

そんな中で、文明(ぶんめい)3(1471)年に西軍の朝倉孝景(あさくらたかかげ)が東軍に寝返ると、追いつめられた西軍は後南朝の小倉宮の子孫と称する人物を「西陣の南帝(なんてい)」として立てましたが、義教の時代に行われた断絶工作が進んでいたうえに、後南朝が三種の神器を持っていなかったことから、いつしか歴史上から姿を消してしまいました。

その後、文明5（1473）年に山名宗全と細川勝元が相次いで亡くなり、同年に義政が義尚に将軍職を譲った後もなお戦いの決着がつかず、開始から約10年後の文明9（1477）年になってようやく終戦を迎えましたが、長きにわたった戦いで、京都の街は内裏（だいり、天皇の居所を中心とする御殿のこと）をはじめとして一面焼け野原となってしまいました。

なお、隠居した義政は、後に銀閣寺または慈照寺（じしょうじ）と呼ばれた東山殿（ひがしやまどの）の建設を文明14（1482）年に始めましたが、その完成を待つことなく延徳（えんとく）2（1490）年に亡くなっています。

応仁の乱が終わったことで、守護大名はそれぞれの領国に戻りましたが、一度火がついた争いは全国に拡大し、各地にあった荘園も、戦いの混乱の中でそのほとんどが守護大名や地方の豪族である国人（くにじん）の支配下に入ってしまった。

また、応仁の乱の頃から、大名の兵力の中心となった足輕（あしがる）の存在が目立ち始めました。足輕は主に金銭面のみで大名とつながっていることが多かったために忠誠心が薄く、このため各地で暴徒化して略奪を繰り返しました。

さらには守護大名が京都で戦っている隙をつくかたちで、各大名の領国では守護代や国人たちが力を伸ばし、大名から領国の支配権を奪っていきました。こうして身分の下の者が上の者の勢力をしのぐ下剋上（げこくじょう）が本格的に始まり、世は戦国時代を迎えることになりました。

なお、戦国時代においても室町幕府そのものは健在でしたが、幕府が持っていた権力が本拠地の山城を除いてほとんどなくなった一方で、征夷大將軍としての形ばかりの「権威」が皮肉にも強調されることになってしまうのです。

5. 時の権力者に振り回された足利将軍

文明5（1473）年、義政が隠居して子の義尚が9代将軍となりましたが、これは義尚の母の日野富子にとっても喜ばしいことでした。彼女は「将軍の妻」という地位を利用して高利貸しなどを行い、せっせと蓄財に励んでいましたが、今度は「将軍の母」として自己の権力を握り続けることができたからです。

しかし、義尚は長享（ちょうきょう）3（1489）年に25歳の若さで子のないまま死亡してしまい、義視の子の足利義材（あしかがよしき）が後継者として翌延徳2（1490）年に10代将軍となりました。

義材は義視の子であり、また義視は富子と激しく対立して応仁の乱が起こったのですから、義材の将軍就任によって富子は当然のように権力を失ったと誰しもが思いますよね。ところが実際にはそうはなりません。

なぜなら、義材の母（＝義視の妻）が富子の実の妹だったからです。応仁の乱のはるか以前にかけていた「保険」によって富子の権力は温存されるとともに、夫と子を失ったことで、富子は蓄財と

権力の保持にますます力を入れるようになりました。

義材が将軍に就任した頃の管領は、応仁の乱での東軍の総大将だった細川勝元の子である細川政元(ほそかわまさもと)でした。勝元はかつて義材の父の義規と連合して応仁の乱を起こしたものの、その後仲違いしたこともあって、義材と政元との関係は必ずしも良くはありませんでした。

それに加えて、義材は自分を将軍にしてくれた「恩人」でもある日野富子と次第に距離を置くようになっていたため、義材に対する富子の不満も高まっていました。

そんな折の明応(めいおう)2 (1493) 年、義材は守護大名の畠山氏を討伐するために河内へ遠征すると、その隙をついて京都で政元と富子がクーデターを起こし、義政の異母兄で初代堀越公方(ほりごえくぼう)の足利政知(あしかがまさとも)の子である足利義澄(あしかがよしずみ)を新たに 11 代将軍に立てました。

無理やり将軍職を追われた義材は、失意のうちに越中(えっちゅう、現在の富山県)へ逃れ、また明応 5 (1496) 年に富子が亡くなったため、以後の幕府の政治の実権は政元が握ることになりました。これを当時の年号から「明応の政変」といいます。

明応の政変は、室町幕府の将軍が、時の権力者たる臣下の思惑によって簡単に交代させられてしまうという事実を世に示したことを意味していました。足利将軍の地位が単なる「権威」に過ぎず、臣下が将軍を必要としなければ、それこそ「使い捨て」のように処分されてしまうという冷徹な現実がはっきりしたことから、この時期こそが戦国時代の始まりにふさわしいという説もあります。

将軍の首を簡単にすげ替えるという実力を示した細川政元の権力は絶大なものとなり、彼はやがて「半将軍」とまで称されるまでになりましたが、そんな政元にも大きな落とし穴がありました。彼は生涯独身を貫いたために養子を複数迎えたのですが、彼らの間で権力争いが生じてしまったのです。

永正(えいしょう)4 (1507) 年、政元は不意を突かれて暗殺されました。これを当時の年号から「永正の錯乱(さくらん)」といいます。政元が殺されたことで細川氏の間で激しい対立が繰り返され、やがて細川氏そのものが没落していくこととなりますが、没落した人物はもう一人いました。それは将軍の義澄です。

義澄は政元と対立しつつも主従関係を維持し続けていたのですが、政元暗殺後に守護大名の大内義興(おおうちよしおき)が新たな将軍後継者を擁立(ようりつ)して上洛(じょうらく、京都へ向かうこと)すると近江に逃れ、翌永正 5 (1508) 年には将軍職を辞めさせられました。

大内の推挙で将軍に就任したのは足利義尹(あしかがよしただ)でしたが、実は彼こそが明応 2 (1493) 年に将軍を廃位された「足利義材」その人だったのです。

歴史上稀(まれ)に見る「将軍返り咲き」を果たした義尹は、その後永正 10 (1513) 年に「義植(よし

たね)」と改名しましたが、永正 15 (1518) 年に大内が領地に帰国して後ろ盾を失うと、政元の養子であった細川高国(ほそかわたかくに)によって永正 18 (1521) 年に將軍の地位を再び追われ、その後は寂しく生涯を閉じました。

細川高国が 12 代將軍として擁立したのは、11 代將軍義澄の子の足利義晴(あしかがよしはる)でした。高国はかつて義澄と勢力争いで対立した経験があったのですが、自らの権力を確立するために義澄の子と手を組んだこととなります。ここまで来ると、もう「何でもあり」の世界ですね。

そんな経緯で將軍になった義晴ですが、約 25 年ものあいだ地位を維持し続けたものの、最後には細川氏の内紛をきっかけに、將軍職を子の足利義輝(あしかがよしてる)に譲りました。

その後、細川氏が内紛を繰り返す間に実力をつけた家臣の三好長慶(みよしながよし)によって、13 代將軍の義輝は傀儡(かいらい、自分の意志や主義を表さず他人の言いなりに動いて利用される者のこと)となりましたが、義輝は諸大名の抗争の調停を行うなど少しずつ政治的手腕を発揮し、幕府権力の復活に努めました。

しかし、こうした義輝の動きを警戒した三好氏の家臣の松永久秀(まつながひさひで)らが永禄(えいろく) 8 (1565) 年に謀反(むほん)を起こすと、義輝は奮戦むなしく無念の最期を遂げました。これを当時の年号から「永禄の変」といいます。

義輝の暗殺後、松永久秀らによって 11 代將軍義澄の孫にあたる足利義栄(あしかがよしひで)が 14 代將軍として永禄 11 (1568) 年旧暦 2 月に擁立されましたが、間もなく久秀らの権力争いに巻き込まれ、將軍として京都にも入れぬ有様でした。

その後、永禄 11 (1568) 年旧暦 9 月に、織田信長が時の正親町(おおぎまち)天皇をお護りするために義輝の弟の足利義昭(あしかがよしあき)を伴って上洛を果たすと、久秀が信長に降伏して、同年旧暦 10 月に義昭が新たに 15 代將軍となりました。なお、將軍を追われた義栄は失意のうちに間もなく亡くなっています。

義昭は自分を將軍にしてくれた信長に深く感謝し、管領もしくは副將軍になるよう勧めましたが、信長はいずれも辞退して、代わりに堺を含む和泉(いづみ、現在の大阪府南西部)の支配を認めさせました。

地位や名誉を欲しがらない信長の意外な行動を周囲は不思議に感じましたが、いわゆる「名よりも実を取った」信長の行為の裏には、彼によるしたたかな計算があったのです。

管領や副將軍を引き受けるということは、信長が義昭の家来になるということを意味しますが、信長の最終的な目標は自身による天下統一であり、いずれは義昭を見限るつもりでした。しかし、その際にもし彼が管領や副將軍であったとすれば、主人に対する裏切りという重罪を犯してしまうこととなります。

いくら戦国の世とはいえ、主君に対する謀反というのはダメージが大きく、後の天下取りにも影響を及ぼすのは避けられません。だからこそ、信長は義昭の誘いを断り、その代わりに最大の貿易港

の一つであった堺を抑えるために、和泉の支配を義昭に認めさせたのでした。

さて、義昭が将軍になったばかりの頃の二人の関係は良好でしたが、信長は次第に義昭を圧迫するようになっていきました。やがて信長の本意を理解した義昭は激怒し、信長を倒すべく様々な作戦を練り始めました。

後の世に「信長包囲網」と名付けられた義昭の行動によって、一時は信長を追いつめたものの、頼りにしていた武田信玄(たけだしんげん)の急死もあって、結局は失敗に終わりました。ところが、信玄の死を知らなかった義昭は、もはや起こり得ない信玄の上洛を信じて、居住していた将軍御所で挙兵したものの、信長に攻められて降伏せざるを得ませんでした。

諦め切れない義昭は、この後もう一度挙兵しますが敗れ、元亀(げんき)4 (1573) 年旧暦 7 月に義昭が信長によって京都を追われたことで、約 235 年続いた室町幕府は事実上滅亡しました。時代は信長による新しい秩序に向けて着実に進んでおり、足利将軍はもはや必要とされなくなっていたのです。

6. 戦国時代を中心とする歴代天皇のご生涯

かくして、後年に「室町時代」と呼ばれた時期は幕府の統率力のなさもあって長いあいだ戦乱が続くことになりましたが、この当時の歴代の天皇はどのようにお過ごしになられたのでしょうか。

正長元 (1428) 年に伏見宮家から即位された 102 代の後花園天皇は、当初は後小松上皇による院政が続いたものの、永享 5 (1433) 年旧暦 10 月に上皇が崩御された後は 30 年余りにわたって親政を行われましたが、その治世は決して平穩(へいおん)ではありませんでした。

先述のとおり、嘉吉 3 (1443) 年旧暦 9 月に京都御所の内裏(だいり)に何者かが侵入し、内裏に火をかけるとともに三種の神器のうち神璽(しんじ)が奪われてしまうという「禁闕(きんけつ)の変」が起きました。その後、神璽は「長祿の変」によって長祿 2 (1458) 年に後南朝から約 15 年ぶりに取り戻されています。

寛正(かんしょう)2 (1461) 年には飢餓(きが)と疫病(えきびょう)が発生し、最初の 2 か月だけで京都で約 82,000 人の死者が出たとされていますが、時の将軍足利義政は自己の邸宅である「花の御所」の改築に夢中になっており、政治には全く関心を示さず、たまりかねた後花園天皇が救済の勧告をされても無視しました。

その後、寛正 5 (1464) 年旧暦 7 月に第一皇子の成仁(ふさひと)親王に譲位されて院政を敷(し)かれると、応仁元 (1467) 年旧暦 9 月には義政の失政を自らの不徳と詫(わ)びられて出家され、文明 2 年旧暦 12 月 (1471 年 1 月) に 52 歳で崩御されました。

成仁親王が 103 代の後土御門(ごつちみかど)天皇として即位されて間もない応仁元 (1467) 年に、先述した大規模な戦乱である「応仁の乱」が発生すると、後花園上皇と後土御門天皇は戦火を避けて

室町将軍の「花の御所」に避難されました。

長引く戦乱によって京都は廢墟(はいきょ)と化し、国土全体が荒廢して朝廷の財政も逼迫(ひっぱく)しました。後土御門天皇は明応9(1500)年旧暦9月に59歳で崩御されましたが、葬禮の費用がなく、ご遺体がおおよそ40日ものあいだ御所に安置されたままだったそうです。

寛正5(1464)年に後土御門天皇の第一皇子として誕生された勝仁(かつひと)親王は、父君の崩御によって明応9(1500)年に104代の後柏原(ごかしわばら)天皇として即位されましたが、即位の祭祀(さい)の費用がなく催行できず、21年後の永正8(1521)年ようやく即位の礼が実現しています。

大永(だいえい、たいえい)5(1525)年に天然痘(てんねんとう)が大流行した際に、後柏原天皇は自ら筆をとられ、宸筆(しんぴつ、天皇ご自筆の文書のこと)の「般若心經(はんにゃしんぎょう)」を延暦寺と仁和寺(にんなじ)に奉納されました。天皇は世の乱れを自らの不徳のせいとしてお詫びされたのです。

翌大永6(1526)年旧暦4月、後柏原天皇は63歳で崩御されました。なお、追号の「後柏原」は、平安京に遷都(せんと)された桓武(かんむ)天皇の別名「柏原帝」に由来しています。

明応5年旧暦12月(1497年1月)に後柏原天皇(当時は勝仁親王)の第二皇子として誕生された知仁(ともひと)親王は、父君の崩御によって大永6(1526)年に105代の後奈良(ごなら)天皇として即位されました。

しかし、朝廷の財政は引き続き窮乏(きゅうぼう)しており、ご即位から10年後の天文(てんぶん、てんもん)5(1536)年ようやく即位式を催行されましたが、その際に大内氏や北条(ほうじょう)氏、今川(いまがわ)氏、朝倉氏らの戦国大名が寄進しています。

天文9(1540)年旧暦6月、後奈良天皇は書写した宸筆の「般若心經」を諸国に奉納され、ご自身の不徳をお詫びされるとともに、疾病(しっぺい)流行の終焉(しゅうえん)を祈願されました。また、天文14(1545)年旧暦8月には伊勢神宮への宣命(せんみょう、天皇の命令を漢字だけの和文体で記した文書のこと)を奉(たてまつ)り、大嘗祭(だいじょうさい、天皇が即位の礼の後に初めて行う新嘗祭=にいなめさいのこと)ができないことを詫びられ、国運と民の興隆を祈願されておられます。

弘治(こうじ)3(1557)年旧暦9月、後奈良天皇は62歳で崩御されました。なお、追号の「後奈良」は平安時代初期の平城(へいぜい)天皇の別名「奈良帝」が由来であり、父君の後柏原天皇(桓武天皇の別名が由来)とともに「桓武-平城」の父子に対応した追号となっています。

永正14(1517)年旧暦5月に後奈良天皇(当時は知仁親王)の第一皇子として誕生された方仁(みちひと)親王は、父君の崩御によって弘治3(1557)年に106代の正親町(おおぎまち)天皇として即位されました。

この当ても戦乱続きで国土が荒れ果て朝廷も窮乏しており、安芸(あき、現在の広島県西部)の戦国大名であった毛利元就(もうりもとなり)の献上金によって、ご即位から約2年後の永禄3(1560)年旧暦1月に

即位の礼を催行されました。

その後、先述のとおり永禄 11 (1568) 年旧暦 9 月に織田信長が天皇をお護りする名目で足利義昭を伴って上洛を果たすと、皇室の危機的な状況に変化が訪れました。京都と畿内を平定した信長は多大な援助を行い、朝廷の権威や財政を回復させましたが、その一方で、自己の敵対勢力に対して正親町天皇による度重なる講和の勅命(ちよくめい、天皇の命令のこと)を実現させています。

講和の勅命としては、元亀元年旧暦 12 月 (1571 年 1 月) の朝倉義景(あさくらよしかげ)・浅井長政(あざいながまさ)との戦いや、元亀 4 (1573) 年旧暦 4 月の足利義昭との戦い、あるいは天正(てんしょう)8 (1580) 年旧暦 4 月の石山本願寺との戦いが知られています。

正親町天皇は信長に信頼と期待を寄せておられたとされ、天正 5 (1577) 年には信長に右大臣を宣下(せんげ、天皇の命令を伝える公文書を公布すること)されました。一方、信長は天正 9 (1581) 年に京都において天皇ご臨席のもとで、一種の軍事パレードともいふべき「馬揃(うまぞろ)え」を行っており、これは信長が自分の力を周囲に誇示するためだったというのが通説ですが、その一方で朝廷に対する圧力もあったとされています。

天正 10 (1582) 年に信長が「本能寺(ほんのうじ)の変」で明智光秀(あけちみつひで)に倒されると、その光秀を破って天下取りに名乗りを上げた羽柴秀吉(はしばひでよし)に対して、天正 13 (1585) 年旧暦 7 月に関白(かんぱく)を宣下され、翌天正 14 (1586) 年旧暦 9 月には「豊臣(とよとみ)」の姓を授けました。

天正 14 (1586) 年旧暦 11 月、正親町天皇は孫の和仁(かずひと)親王に譲位され、仙洞御所(せんとうごしょ、譲位された天皇の御所のこと)に隠退(いんたい、世間を避けて閑居すること)されました。譲位を予定しておられた第一皇子の誠仁(さねひと)親王が同年旧暦 7 月に薨去(こうきょ、親王などがお亡くなりになること)されたので、その第一王子の和仁親王に譲位されたのです。その後、文禄(ぶんろく)2 (1593) 年旧暦 1 月に 77 歳で崩御されました。

なお、和仁親王は 107 代の後陽成(ごようせい)天皇として 16 歳で即位され、その治世は秀吉政権から徳川家康(とくがわいえやす)の江戸幕府にまで及びますが、その詳細は次回(第 75 回)の講座で明らかにします(続く)。

主要参考文献：「逆説の日本史 7 中世王権編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)
「逆説の日本史 8 中世混沌編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)
「逆説の日本史 10 戦国霸王編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)
「逆説の日本史 12 近世曙光編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)
「闇の歴史、後南朝」(著者：森茂暁 出版：角川新書)

「皇位継承事典」 (著者：吉重丈夫 出版：PHP エディターズ・グループ)
「新版 新しい歴史教科書 中学社会」 (出版：自由社)
「詳説日本史 B」 (出版：山川出版社)
「日本人の誇りを伝える最新日本史」 (出版：明成社)
「年代ごとに読める歴史事典 最新日本史教授資料」 (出版：明成社)

黒田裕樹の歴史講座

<http://rocky96.blog10.fc2.com/>

黒田裕樹の歴史講座+日本史道場+東京歴史塾

<https://rekishidojo.com/>

※黒田裕樹の「百万人の歴史講座」でダウンロードできる全ての pdf (テキストファイル) は、黒田裕樹が著作権を持つ著作物であり、またその販売権は「南木倶楽部全国」を主催する南木隆治にあります。これらのファイルを第三者が再販売・不特定多数に対して再配布することはできません。